



一  
猷  
蝕  
太  
平  
樂  
記  
八

~ 13  
3553  
8



門 13  
3553  
卷 8

00

早稲門 大學 圖書館  
33.11.10 雙  
藏 書



原姓

本架沈巻の八

目録

一 且元政所を述しし事

并 小村高りと成る事

一 且田村の依幸村の城

并 其素の君びの若を養育す

一 且田の河津下地

并 幸村の力に依る事

大正十一年

厭鉄右平樂比卷の八

且元政所をすしまさしる事  
兼 末村富かとり

是は政所への役を文て派と流たがれ我われ小村の  
時よりあつて流と活なりて流と源  
く我もとるふあつて流と活なりて流と源  
は流と活なりて流と源

大正...

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*





として重宝して以て此の邊の地を治る者多かるが  
 小土車以て人々を原に誘ふなり如く傳へ  
 とふやく高き山ありけり此の對面とて地を  
 を治る者も相違なく治りて地を治る者  
 といれり此の邊に長治して律法を以て治る  
 の從黨は少くともあるは斤相違ひて封じし  
 て人々は亦も此の邊に治る者多かるなり  
 して二石の邊に治りて地を治る者多かる  
 昔封て治る者少くともあるは斤相違ひ

及て石を以て治る者多かるは律法を以て治る者  
 といふは此の邊に治る者多かるは律法の一  
 律法を以て治る者多かるは律法の一  
 律法を以て治る者多かるは律法の一  
 律法を以て治る者多かるは律法の一  
 律法を以て治る者多かるは律法の一  
 律法を以て治る者多かるは律法の一  
 律法を以て治る者多かるは律法の一  
 律法を以て治る者多かるは律法の一  
 律法を以て治る者多かるは律法の一  
 律法を以て治る者多かるは律法の一  
 律法を以て治る者多かるは律法の一  
 律法を以て治る者多かるは律法の一  
 律法を以て治る者多かるは律法の一



此の共は及入中川と波の流るる事にて海  
 宿の酒と乃ん下体座の并村の百姓を  
 下印して流るる銭は丹の唐もさるる  
 地よりして石の土蔵に貯るる穀を  
 此の流るる事にて子なる長りて流  
 谷のけしけり物かまハガ心と体の力を  
 端なく並村の事ある事にて流るる事  
 切るる事にて流るる事にて流るる事  
 一とち波の流るる事にて流るる事

高き事にて流るる事にて流るる事  
 服の事にて流るる事にて流るる事  
 時高き事にて流るる事にて流るる事  
 大流の事にて流るる事にて流るる事  
 人徳の事にて流るる事にて流るる事  
 部入道の事にて流るる事にて流るる事  
 首の事にて流るる事にて流るる事  
 加と流るる事にて流るる事にて流るる事  
 一と流るる事にて流るる事にて流るる事

の勢ぞく 俣子く集来て了る存と盡かす哉  
ふしと想うるは 浪のゆく川軍  
形くち登し並たがらありし 首元と珠中程  
幽く暮らぬは 古の物に海濱の  
猶き 自前も 是とて海に 戦之程  
はるばる 望望と 皇と 廣く 首の  
くると 居ぬる ありし 皇と 是と 浪んとお  
めし 片月けらる 辰の 新七徳の 高の 地のお 織  
田を 赤井 治井 岡部 さら 大聖 浪理 主と して

序を 亦大聖 又 浪理 皇と して 皇成の  
曰 誠と 是の ありし 皇と して 詞の 末  
猶き 皇と 是と 皇と して 皇と して  
けりし 皇と 是と 皇と して 皇と して  
あつと 皇と 是と 皇と して 皇と して  
て 痛と 皇と 是と 皇と して 皇と して  
と 皇と 是と 皇と して 皇と して  
道南の 皇と 是と 皇と して 皇と して  
皇と 皇と 是と 皇と して 皇と して



由入て統率陣する中  
 せんせりともと  
 人整るるふ角目城  
 竹角陣用懸  
 又中  
 角七徳の角  
 村と  
 て  
 少

其國を居る所村を陣

其國東の角の者を生捕

此ふふ國幸村ハル村の  
 一



由きて海に之を見たり  
 之流に之を流るるを  
 地を以て之を知るも  
 之を知るも人格を以て  
 まをやく痛く  
 之の清くも  
 之の清くも  
 尤海に之を流るるを

若し之を以て馬は鬼と  
 之人方其物に之を流るる  
 之を流るるも  
 此は甚く八海に之を流るる  
 之を流るるも  
 之を流るるも  
 之を流るるも  
 之を流るるも

今亦何んはも糸上はりては上も者も一合七  
 彼彼入軍兵は海に流るる糸も一合七  
 五べしと一りんは女に伝はれりてさるるゆ  
 今幸打つる人の殺して刀謀波一もいも  
 城平たはる事と那て候ひる候も謀事村  
 目ら一を更もい史より由る洋走ふ可なり  
 秀利の由る候も候も流るる候も  
 申さる由る候も十候内府に候も  
 らば候もせしと由る候も長考我の候も

少く日本の形もい夫もと音城一もい  
 海の美といふ海友の向いふも夫もい  
 利之候も復候は候もい  
 治替因の信といふ一不も復候も村もい  
 此の候も同い候もい  
 とふ村もい候もい  
 何れもい候もい  
 て利戦もい候もい  
 改を改もい候もい

十日乙未の夜、中野の如路の大名ある  
 べし。我々の行の遠は、安ふむの遠斗  
 かり。是の治の上村の目ふ、人益曲を、若者某が  
 内縁の、肉の、一、味、者、多、く、極、く、あ  
 くの、み、ま、り、し、け、あ、の、り、あ、び、の、人、人、  
 ち、い、と、て、京、中、の、火、や、や、り、し、り、の、人、人、  
 系、終、く、押、あ、た、り、と、ら、ま、り、又、板、倉、と、村、を、  
 高、と、安、と、し、と、り、幸、村、を、と、り、け、し、  
 此、ふ、し、と、り、あ、び、と、ら、ま、り、と、り、人、人、  
 入、り、治、の、名、も、あ、り、と、ら、ま、り、と、り、  
 止、ま、り、下、海、と、り、幸、村、を、あ、り、と、り、  
 し、と、ら、ま、り、と、り、あ、び、と、ら、ま、り、と、り、  
 し、と、ら、ま、り、と、り、あ、び、と、ら、ま、り、と、り、  
 と、り、あ、び、と、ら、ま、り、と、り、あ、び、と、ら、ま、り、  
 の、後、と、り、あ、び、と、ら、ま、り、と、り、あ、び、と、ら、ま、り、  
 し、と、ら、ま、り、と、り、あ、び、と、ら、ま、り、と、り、  
 治、と、り、あ、び、と、ら、ま、り、と、り、あ、び、と、ら、ま、り、  
 思、ふ、と、り、あ、び、と、ら、ま、り、と、り、あ、び、と、ら、ま、り、

入、り、治、の、名、も、あ、り、と、ら、ま、り、と、り、  
 止、ま、り、下、海、と、り、幸、村、を、あ、り、と、り、  
 し、と、ら、ま、り、と、り、あ、び、と、ら、ま、り、と、り、  
 し、と、ら、ま、り、と、り、あ、び、と、ら、ま、り、と、り、  
 と、り、あ、び、と、ら、ま、り、と、り、あ、び、と、ら、ま、り、  
 の、後、と、り、あ、び、と、ら、ま、り、と、り、あ、び、と、ら、ま、り、  
 し、と、ら、ま、り、と、り、あ、び、と、ら、ま、り、と、り、  
 治、と、り、あ、び、と、ら、ま、り、と、り、あ、び、と、ら、ま、り、  
 思、ふ、と、り、あ、び、と、ら、ま、り、と、り、あ、び、と、ら、ま、り、



山科ちまのりし酒飯としんをひん  
 まてや院し酒飯ともて家者酒を  
 中とまのりし酒飯ともて家者酒を  
 後まねるるといふ人連く急く生捕く事  
 入物とて病治する人返りのまのり  
 とまのり酒も女酒とていふ内儀入る  
 候まねるるといふ人連く急く生捕く事  
 けま人と撰ていづくもまのり酒も  
 へけま人と撰ていづくもまのり酒も

酒とていづくもまのり酒も  
 まのり酒も女酒とていふ内儀入る  
 候まねるるといふ人連く急く生捕く事  
 けま人と撰ていづくもまのり酒も  
 へけま人と撰ていづくもまのり酒も

敵を法ねしをせりてあま事村の目せりては  
 牛と云く一國宗の事とはなげふたは一母  
 清ま味もの吉のやゆもまのく忠臣  
 ともらや味中くを撰ん事一幸経  
 とふ少備を種よはせられたり少備宗を事村  
 の由り事村にせりて事村幸村と云く  
 がゆと云く一をせりて事村幸村と云く  
 政通と云く一をせりて事村幸村と云く  
 海が事村と云く一をせりて事村幸村と云く

と云く補もの海が事村と云く一をせりて事村幸村と云く  
 と人白杖せりて一をせりて事村幸村と云く  
 如きの悪人と云く悪を仰も心は理と云く  
 皆しをみく一をせりて事村幸村と云く  
 けいめしむる事人と云く一をせりて事村幸村と云く  
 切あし一助を揚が事村と云く一をせりて事村幸村と云く  
 事村と云く揚が事村と云く一をせりて事村幸村と云く  
 人のゆびむと云く一をせりて事村幸村と云く  
 事村と云く揚が事村と云く一をせりて事村幸村と云く





倉庫の内とんふ及んで積田の土舟に  
 け河の土舟行夏物やよはしむらうやしがら  
 せひらやとく幸村が口は八洲連に絶て銅  
 鑛煮く時高橋津と牡丹屋といふかま  
 めの土舟麻半といふ者が深半といふ  
 ちかみんをいれやとてしむはよとて  
 船にゆく物鮮玉はなまきりしむは  
 流正方の流より煮入りやとてしむは  
 ちとてしむはふかまといふしむは  
 教へむかへ流すけしむはなまきりしむは  
 流正方の流より煮入りやとてしむは  
 ちとてしむはふかまといふしむは  
 教へむかへ流すけしむはなまきりしむは

其 幸村も丸と集く  
 其 幸村も丸と集く

引く咄く之角つて汲河連下絶の事と  
しつ秀頼公と此の事ありて内家の事と  
まはれ忍座にて大御と石もさる汲河連下絶  
くちの業はるやいづかへんといふ事あり  
畏くて我も行くも事ありと云ふ事あり  
云々此の地は埋立をて松の山と云ふ地中  
にありていづかへんといふ事あり  
水とありて連立のやうなりていづかへん  
と云ふ事ありていづかへんといふ事あり

忽はのち後して此の事ありて後事あり  
く此の事ありていづかへんといふ事あり  
まの事ありていづかへんといふ事あり  
る事ありていづかへんといふ事あり  
此の事ありていづかへんといふ事あり  
と云ふ事ありていづかへんといふ事あり  
切の事ありていづかへんといふ事あり  
相ありていづかへんといふ事あり  
と云ふ事ありていづかへんといふ事あり



及倉より里見く子兵と云く江守より兵を中  
 意して井伊及石を多く奪う一戦と傳へたり況  
 して法橋と登きしと傳へり時兵守を及  
 の元九月に後府へ進して別本多中兵及  
 兵守と傳へり後府兵の名東條と申ありしは  
 の根と傳へり後府兵の名東條と申ありしは  
 少く兵守と傳へり後府兵の名東條と申ありしは  
 と申多と云く此と事也と申江守と云く  
 兵守と傳へり後府兵の名東條と申ありしは

兵守と傳へり後府兵の名東條と申ありしは  
 用之と云く兵守と傳へり後府兵の名東條と申ありしは  
 兵守と傳へり後府兵の名東條と申ありしは  
 兵守と傳へり後府兵の名東條と申ありしは  
 兵守と傳へり後府兵の名東條と申ありしは  
 兵守と傳へり後府兵の名東條と申ありしは  
 兵守と傳へり後府兵の名東條と申ありしは  
 兵守と傳へり後府兵の名東條と申ありしは  
 兵守と傳へり後府兵の名東條と申ありしは  
 兵守と傳へり後府兵の名東條と申ありしは  
 兵守と傳へり後府兵の名東條と申ありしは

ありしにほくぬやうにさしつかへし  
 所相の存意ありしを以てしるす  
 乃後神武天皇の御代に於ては  
 神武天皇の御代に於ては  
 用乞はざる下りては  
 日有らば及幼少の事  
 不承はるる井伊及是の代に  
 伊波の事及是の代に  
 伊波の事及是の代に

内縁乃若人真田又向し  
 水乃名も不討なりといふ  
 未だ向ふ及むる事  
 多しと聞事申す  
 討死の人数多し  
 多しと聞事申す  
 討死の人数多し  
 多しと聞事申す  
 討死の人数多し

清くもきくく一物あるも平好みの眼色井付く  
 改に渡也却る所一りる居けあふく津にた  
 てあ片へを私に勢と率一絶向ふ命一きふ  
 なる虎はせむせむしや一土百余人の勢と使に  
 れも渡也の候んく大坂う一を押寄る人  
 十月あり朝彦をきくふとらん渡也劫を信  
 比の睦るとし津の信り道不ぬらると此を  
 朝彦也引まな鳥一由を幸ふ刀陣はふしと  
 したんを別あむ一の海さす一の幸く

先ぞち鳥一由の子勢の命余人と川軍くあ  
 る渡也劫を信一はとあふとてしとる時を  
 ち候し海中一あま一とあひく一子も  
 才ふ勇まを付海にたふふあふ成くやし  
 鳴く人渡也引まの若れ城のもあし川を  
 へく渡也一ち候不怒と一居さし津にた  
 眼りやむる勢とあふとらん渡也劫を信  
 一人一対面一と心信る一とあふ人入  
 替ゆる人入しけ一獲り勢ふあふとる

以存人<sup>る</sup>と<sup>し</sup><sup>る</sup>卒<sup>る</sup>を<sup>し</sup>く<sup>て</sup><sup>し</sup><sup>て</sup><sup>し</sup>あ<sup>ら</sup>め<sup>け</sup>たり

一 歴々太平東化是の以終



